

特 集

## 東日本大震災における学生ボランティア活動報告 －防災関連サークルが企画した被災地ボランティアで考えたこと－

服部 将茂<sup>1</sup> 前田 志織<sup>2</sup> 立木 真美<sup>3</sup>

### 要旨

2011 年 8 月 31 日から 7 日間、日本赤十字豊田看護大学の赤十字及び災害に関連する 3 つのサークルが共同で、東日本大震災の被災地でボランティア活動を行った。本稿は、活動の概要と参加した学生 24 名でまとめた活動報告である。ボランティアに参加した 24 名は、2 つの学生ボランティアを支援する団体の協力を得て、岩手県釜石市と宮城県七ヶ浜で活動した。発災から半年たった被災地でのボランティア活動は、主に応急仮設住宅の集会所の運営とコミュニティの支援であった。7 日間の活動を振り返ると、被災者との関わりから多くのことを学んだ。ボランティアの責任を含めた「自己完結」の意味、被災者に寄り添う姿勢、自分たちの心のありよう等は、参加した全員が共有するものであった。

キーワード 学生ボランティア 被災地 応急仮設住宅 コミュニケーション

### 1. はじめに

2011 年 3 月 11 日以降、繰り返される東日本大震災の報道に、赤十字の看護大学で学ぶ自分達にも何かできないか常に考えていた。今すぐにでも被災地に向かいたい気持ちで、4 年生の有志を集め『豊田看護大学災害救援ボランティアサークル』を立ち上げた。しかし、タイトな講義スケジュールの合間を縫って時間をとることは難しく、講義後と週末の街頭募金活動が、唯一自分達ができる被災地支援であった。そのような中、夏季休暇に入るとサークル仲間から「被災地に行こう！」と声が上がリ、被災地に行くための計画を大学の教職員を巻き込み話し合った。「何かしたい」という皆の思いが結実し、8 月 31 日より 7 日間、日本赤十字豊田看護大学（以下本学）災害救援ボランティアサークルと赤十字奉仕団、赤十字防災サークルが協同して、24 名の学生が被災地で

のボランティアを体験することができた。本稿では、参加した学生全員で体験を共有したボランティア活動報告会の内容を報告する。

### 2. 活動内容

#### 1) 活動の決定から出発まで

参加するボランティア団体としては、災害ボランティアサークルの部長であった 3 年生（当時）の尽力によって、15 名程度の学生を受け入れてくれるボランティア団体を選出し、いわて GINGA-NET プロジェクトと特定非営利活動法人（Non-profit Organization：以下 NPO）レスキューストックヤードに決まった。

ボランティアに行くことが現実的になってからは、準備に追われる毎日であった。8 月 31 日の出発までには、被災地におけるボランティアの心得、自己防衛、こころのケア、グループ作り、活動内容の検討など、合計 3 回の事前ミーティングを、サークル顧問である教職員と相談しながら行った。1 年生の参加が多かったために、被災地で 4 年生である自分達がフォローできるのかどうか

<sup>1</sup> 名古屋第二赤十字病院

<sup>2</sup> 名古屋第一赤十字病院

<sup>3</sup> 刈谷豊田総合病院

表 ボランティアの全実施行程

日 (曜日)	岩手 (16 名参加)	宮城 (8 名参加)
8/31 (水)	18:00 JR 名古屋駅出発	
9/1 (木)	8:30 岩手県気仙沼郡五葉公民館着 活動のオリエンテーション 活動地域の視察、地元住民との食事会	11:00 スパーク七が浜着 活動の打ち合わせ 現地の視察
9/2 (金) - 9/4 (日)	9:00-15:30 お茶っこサロンの運営 19:30-20:30 活動ミーティング 21:00-23:00 交流の時間	9:00-15:00 応急仮設住宅集会所での活動 (血圧測定等) 20:00-23:00 活動ミーティング
9/5 (月)	9:00-15:00 お茶っこサロンの運営 19:30-21:30 解散式 22:00 バス出発	9:30-15:00 活動のまとめ 15:00-19:00 現地交流会 0:00 バス出発
9/6 (火)	11:00 JR 名古屋駅着	

を心配しながら、デブリーフィング (debriefing: 災害に遭うなどつらい体験をした後で、その経験について詳しく話し、つらさを克服する方法) がスムーズにできるように個々の関係性を深めた。活動の全スケジュールを表に示す。

## 2) 岩手県釜石市での活動 (岩手組)

いわて GINGA-NET プロジェクトは、岩手県立大学学生ボランティアセンターを中心に岩手県内の社会福祉協議会、岩手県内外の NPO 法人が協力して立ち上げた大規模災害時のワークキャンプ型学生ボランティアである。プロジェクトの主旨は、大学生という潜在的な人材を活用し、被災地のニーズと学生ボランティアを結びつけることとされた。プロジェクトの活動は、岩手県気仙沼郡住吉町の小学校の体育館を拠点に、大槌町、釜石市、大船渡市、陸前高田市で、応急仮設住宅の集会所におけるコミュニティ支援、子供の遊びや学習支援、地域のイベント支援であった。7月27日から9月27日のプロジェクト開催期間に参加した大学は146校、合計1198名の学生が活動した。

いわて GINGA-NET プロジェクトには、16名 (4年生6名、1年生10名) が参加した。初日はバスに乗って岩手県沿岸部の視察に行った。参加者は私達のように看護大学から来ている学生や福祉関係の大学、医療に関係ない大学の学生等、学問領域が様々であった。

自分たちが活動した釜石市の被害は甚大で、沿岸部を中心に9mの津波にのまれ、後方の高台には15m以上の津波が遡上したと報告されている<sup>1)</sup>。新日本製鉄所から釜石漁港付近は、9月になっても損壊した家屋がそのままの状態に残っていた (図1)。また、8月下旬に釜

石市の避難所は閉鎖されたが、津波や地盤沈下のため小学校の敷地や狭小な土地に30～50戸ぐらいの小規模な応急仮設住宅が散在していた。我々が訪問したときは、避難所から応急仮設住宅に移住して1か月経つか経たないかの住民が多かった。

4日間の活動は、同じ大学の学生が重複しないように組まれたグループ単位で行われた。それぞれのグループが、7～8か所の集会所のひとつを訪問し、「お茶っこサロン」の運営を中心に活動した。前週に同じ応急仮設住宅を訪問したボランティアが感じたことをノートにまとめてあり、それを読みながら明日どのようなことをするのか、何が必要であるか、何に気を付けて関わっていったら良いかを話し合った。実際に応急仮設住宅に行くと、地域によってニーズは様々で、子供といっしょに遊ぶ、梅干しを持って個々の家を訪問し話を聞くなど、その場でできることを前日の話し合いをもとに行った。活動後は、実際に行ってみて感じたこと、困ったこと等を持ち帰り、明日以降何が必要なのか、私達には何ができ



図1

るのかを話し合った。4日間の短い関わりであったが、1日目に集会所に来た母親が2日目に「ママ友」を連れてきて震災の話をする、ボランティアを交えた住民の皆で話をする中で自治会を作ろうという意見が出るなど、コミュニティの形成に少し役立てたと感じた。

### 3) 宮城県七ヶ浜での活動（宮城組）

宮城県へ向かった8名（4年生5名、2年生3名）は、特定非営利活動法人レスキューストックヤードが運営している宮城県七ヶ浜町のボランティアセンターを拠点とし、応急仮設住宅の集会所4か所を訪問した。七ヶ浜は、仙台中心部から北東へ車で約30分程度の場所であり、その名の通り「七つの浜」に囲まれ、漁業や観光が盛んな地域であった。発災時10mを超す大津波が来襲し、町内の沿岸部は壊滅的な被害を受けていた。しかし、沿岸から2~3km内陸の高台にあった役場や新興住

宅地は、津波の被害を免れていた。車で現地を視察した際、わずか数百メートルの差によって被害を受けたか受けないかがはっきりと分かれた地区だという印象が残った。道路は舗装されて通れるようになっていたものの、津波で流された家屋や瓦礫が道路わきに放置されていたり、浜辺にコンテナが打ち上げられたままになっていた（図2）。6月下旬に町内の避難所はすべて閉鎖され、避難していた1,285名が7か所の応急仮設住宅に入居していた<sup>2)</sup>。

我々は看護学生にできることをやってほしいとのボランティアセンターの要望を受けて、血圧測定、ハンドリフレクソロジー、健康教育を実施した（図3）。血圧測定に対しては、「血圧を測ってもらうだけで安心する」といった声が多く寄せられた。ハンドリフレクソロジーは手の疲労回復やリラックス効果を目的として行ったが、「疲れがとれて気持ちいい」という声とともに、タ



図2

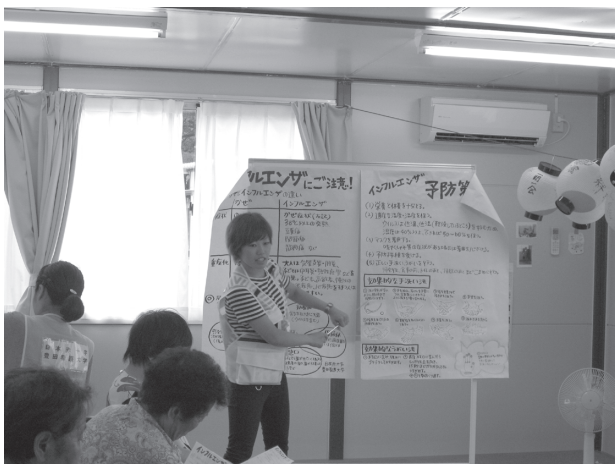


図3



ッチングにより距離が縮められ、お互いに話しやすくなったという効果もあった。健康教育は、特に現地のニーズにあったものを行いたいと考え、体力低下予防、熱中症予防、PTSD、感染症の4つについて事前に学習して行った。わかりやすいように知ってほしい内容を模造紙に書いたり、配布資料を用いたりして行った。集団教育として準備したもののPTSDや熱中症予防は、住民の要望が思った程なく、主に体力低下予防の運動を皆で楽しく笑いながら行った。

### 3. 活動を通して考えたこと

以下の項では、ボランティアに参加した学生全員で共有し、本学に報告した内容に沿って述べていく。

#### 1) 応急仮設住宅を訪問するボランティアとして気づいたこと

応急仮設住宅におけるサロンの運営方法は、住民の年齢構成や移住時期によって応急仮設住宅ごとに異なっていた。一部の地域ではサロンを立ち上げたばかりで、主に子供の遊び場とされ、成人や高齢者は来ていない状況だった。集会所を訪問した初日の話し合いで、他のグループの学生から「ボランティアは、談話室でクーラーを付けてくつろいでいるだけだ」と住民が話していたことを聞き、当たり前のことだが応急仮設住宅では、節電としてクーラーも付けずに過ごしていることに気づいた。自分たちは名古屋から行ったが、「8月で暑いからクーラーをつける」という行為は当然であると考えていた。この住民の発言から、「自分たちは今被災地に来ている」ということを再認識し、被災者が何を思っているのか気づく感性が必要だと思われた。また、ボランティアの行動が住民に見られているということも改めて意識した。

夜のミーティングで何度も話し合われたのは、「ボランティアとは何か」であった。ある日のミーティングで、『午前には足湯の呼びかけをした時に心配になった住民の方がいて、午後に再訪問しようとしたら、同行していた先生たちに「状況判断できる人間だけで行く」と言われた。すごく心配だったので、なぜついて行ってはいけなかったのかわからない。自分だって血圧測定ぐらいできる。何より心配だった。』と2人の学生から報告があった。この報告をきっかけに、「看護学生だからといって何ができるのか」「ボランティアは自己犠牲なので

はないか」等、大議論が始まった。私達も看護学生だからと気負っていたが、4年生であってもまだまだ知識は浅く、相手の求めている答えを出せなかったり、知っていることでも理解しやすい言葉で伝えることができなかったことが多々あったこと、すべてを背負う必要はないと思うことを伝えた。ここで皆が出した結論は、自分のことができるできないことを明確にし、できる範囲の行動をとることが重要というものであった。つまり、報告された場面では緊急か否かの判断が必要であり、私達がいっても野次馬のようになるだけだから行く必要はないという答えを導き出していた。被災地では「自己完結型」ということが事前学習でも言われていたが、自己完結の中にはボランティアの活動範囲における責任も含まれていることをこのミーティングを通して知った。

#### 2) 住民の気持ちに配慮した行動をとること

サロンを手伝っていた時、ボランティアが「ぜひ来てください」「一緒に話をしましょうよ」と繰り返し誘い、住民に強要するような態度をとっていた場面が何度か見られた。そこにいる人の中には「一緒にいたのに自分だけが助かったから、集会所にはいけない」との思いを持っている人もいた。コミュニティの形成には、外に出ること、コミュニケーションをとることが重要である。しかし、それはボランティアのペースではなく、住民の思いを理解し、その思いを尊重した態度が必要である。また、発災直後の写真を見ながら、「もっとひどかったんだよ」「だいぶきれいになったよね」という話は、自分の目で見ると「点」でしか捉えられないことでも、その地域に住んでいた方は今までの人生があり「線」で感じていると思われた。

住民との会話は震災について語られることが多かった。「なあんにも、本当になあんにもなくなったよ」「ただ見とるだけだった」と語られ、頷くだけで返答に困ったことが度々あった。被災地の人々の語りの中には、震災にあった人しかわからないこともあり、何か言ってほしいから自分達に話しているのではなく、私達が受容・共感することで相手の気持ちの整理につながることを伝えようとしてくれることを懸命に聴くことが聴く側の役割と感じた。「被災者に寄り添う」とよく言われているが、それは何かをすることではなく、被災した方々の体験や人生に思いを馳せ、その時間を共有することだと考えられた。

### 3) 子供達の行動から学んだこと

岩手組が活動した応急仮設住宅は子供が多かったこともあり、子供との関わりをどうするかがよくミーティングの話題に挙がった。私が関わった子供の中で1組の小学校低学年の男子が強く印象に残っている。2人は男女関係なくボランティアに殴りかかる、あるいは蹴るといった攻撃的とみられる行動を繰り返していた。ある雨の日、増水した川に近づき、覗くように川を見てから「津波なんて大っ嫌いだ」と大声で叫びながら川から走って離れるという遊びを飽きずにしていた。自分は攻撃的になっている2人の子供をみてもどう対応したらよいか、よくわからず「だめだよ～」と言いながらも一緒に川を見に行く、蹴られた時には追っかけて蹴り返すような真似をした。大学に戻って皆で子供の行動について話し合った時に、2人の行動は典型的な震災後の反応であることに気がついた。被災した子供の対応に関して、子供が攻撃的になることの意味や基本的に行動を止めたりはせず発散できる場を提供することが必要という知識がなければ、ボランティアが子供の行動を禁止してしまい、ストレスを発散する場を失ってしまう。ボランティアに参集した学生が持っている知識だけでは十分ではないため、被災した人々に関わるボランティアすべてが、子供たちがどのような反応をするのか事前に理解し、子供の行動の意味を捉えて関わる必要があるだろう。

### 4) ボランティアの心の動き

「お母さん」というと暗い顔をする子供や、会話の中で家を流されたことや友人が流されていったことを思い出し、涙を流す人もいた。また、「隣の家から線香の匂いがしても子供達に騒がせないようにしている」など、大人の会話は生死にかかわる話が多く、言葉選びが難しく、沈黙の中でどのような表情をしていいのかわからないことが度々あった。震災に関わる生死の話は、ボランティアに行く以上避けられない。住民が生死の話をするには相当の覚悟が必要だったはずである。沈黙から逃げないでその場で話を聞く、そのこと自体に意味があるのだと思った。しかし、実際にこのような話を聴くことは、我々のような学生のボランティアには負担が大きい。だからこそ、同じ体験をした仲間と話し合い、自分自身のストレスになっていることに気づき、言葉に表すことが必要だと感じた。自分自身が話を聴いてもらうだけでとても気持ちが軽くなったことも多い。また、もや

もやした気持ちや気にかかったことを仲間に相談し解決策を見つけることは、新たな気持ちで翌日の活動に向かえることができ、住民の方の話から逃げずに耳を傾けることができる。ボランティアの心の整理をするためにも、ボランティアの仲間を意識し、助け合うことが重要だと考える。

### 5) 個人情報に関して

今回参加した2つのボランティア団体にはともに、継続した支援を目的にしたボランティアの「引き継ぎノート」や「つぶやきカード」があった。そこに記述された内容には仮設住宅の住民の個人を特定できるような情報が含まれていた。今回のボランティア活動を通して、プライバシーの保護や守秘義務と情報共有の線引きがとても難しいと感じた。住民により良い支援を行うためには、ボランティア同士の情報共有は欠かせない。しかし、プライバシーの保護について考えると、すべての情報を共有することがいいことだとは言えない。ある自治会役員の家族が、「自分の知らないうちに自分の事情が皆に知れ渡っている」と嘆かれていたことを考えると、ボランティアにおける情報の取り扱いには十分な注意が必要であろう。今後、どのような情報が活動に必要なのかを吟味して、共有すべき情報をボランティア間で決めていくことが求められる。病院実習では、知り得た個人情報は外部に漏らさないことが徹底されてきた。相手の個人情報に関しては外部に漏らさない、その点は被災地支援のボランティアでも同様であろう。ボランティアを行う一人一人が意識しなければならないことと思われた。

## 4. おわりに

今回、学生同士や教職員あるいは現地に行ってから被災者とのかわりを通して、コミュニケーションの大切さを改めて感じた。看護学生は将来、看護師・保健師になるに当たりコミュニケーションが重要であることは言うまでもない。特に看護は、相手を思いやる気持ちや相手と共感できる関わりが基本であり、今回のボランティアの体験からその多くを学んだ。学生のうちから積極的に人と関わり、コミュニケーション能力や協調性を高めていけるような環境に身を置くと良いと思う。

今回の活動は大学側から多くの支援を受けて実現することができた。今後も学校生活やボランティア活動を継

続して行うには、大学側からの支援は必要不可欠であろう。

#### 謝辞

最後に、大変苦しい状況にも関わらず、未熟な学生を受け入れて下さった仮設住宅の皆さまに心から感謝いたします。

#### 引用文献

- 1) 特定非営利活動法人レスキューストックヤード (2012). 東日本大震災の活動、<http://rsy-nagoya.com/higasinihon/> (2012.9.30 閲覧)
- 2) 釜石市防災対策本部 (2011). 平成 23 年 (2011 年) 東日本大震災被害状況等について、<http://www.city.kamaishi.iwate.jp/index.cfm/10,19080,c,html/> (2012.9.30 閲覧)